



大学卒業式に卒業生たちと。
左から2人目がラジャブザーデさん



教え子の
結婚式にて



外交官時代。皇居にて



イランへの研修旅行で学生が、
大学の図書館でラジャブザーデさんの
著書を見つけた

外国人 と生きる

ラジャブザーデさんの引越し

藤元 優子 (ふじもと ゆうこ)

大阪外国語大学助教授

日本人になったイラン人

ハーシエム・ラジャブザーデさんとわたしとの同僚としてのおつきあいは、もうかれこれ二〇年にもなる。外国語大学という職場の性格上、外国人の先生は数多くお見かけするが、彼ほど手のかららない人はほとんどいないだろう。大阪に赴任する前に、東京の大使館で四年、大学で二年半過ごしたので、日本語の日常会話には問題ない。独り身の身軽さもあってかフットワークが軽く、外交官時代の友人知己を含め、日本人との交友関係もわたしほどより何倍も広い。そのうえ、分厚い『日本史』をまとめたほか、『徒然草』や『坊っちゃん』など、日本文学のベルシア語翻訳も出版しているほどの日本語通である。日常生活の援助などほとんど必要ないどころか、例えば京都の古道具屋はたぶん踏破しているし、良質の和紙はどの店にある、などと教えていただいたりする。

わたしはよく学生に、「イラン人がみんなラジャブザーデ先生みたいだと思っている」と、イランに行つてびっくりするからね」と冗談めかして言う。彼の小柄な瘦身からは、几帳面、律儀、生真面目、勤勉、それに謙譲という美德のオーラが放たれている。約束厳守、研究一筋、休講皆無。イランやベルシア語について一言質問すれば、出典のコーヒーツきで詳細に答えてく

れる。さまざまな書類も本もどのように整理されているのか、必要とあればたちどころに出てくる。交渉事は粘り強くおこなって最後までやり遂げるが、自己顕示欲は強くない。十把一絡げの危険性は承知のうえで言わせてもらえば、彼は「イランらしくない」と言うより、これじやあまるで「昔の日本人の美点のオンパレードだ。彼自身、二あつまり長く日本にいたので、日本人になってしまいました」などと言ったりもする。

終の棲み家を北摂へ

そんなラジャブザーデさんが、来年三月の停年を前に、二〇年以上暮らした大学宿舍の小さなアパートを出て、北摂（大阪府北部）に家を建てた。一九七九年のイスラーム革命後、お上に召し上げられてしまった土地の対価を大統領に直訴してようやくとり返したお蔭とはいえ、ローンまで組んで臨んだ大きな買い物である。彼は何を思つて、家族も親戚もない大阪の新興住宅地に終の棲み家を求めたのだろうか。彼は奥ゆかしくてあまり自分の思いを語らないので、根掘り葉掘り聞いてみた。

ひとつは、理想の追求。イランと日本の文化交流に半生を捧げてきた者として、彼は自宅に私設図書館を作り、イランの

美術品も展示して、研究者や学生に提供したいと考えていた。実際、歴史や旅行記を中心とする五〇〇冊余りの蔵書は、個人蔵としては国内で稀有のコレクションである。将来的には、どこかの大学と契約を結んで、付属の研究所にもらえたら、と彼は願う。じつは過去に、古代ベルシアと縁のある奈良の明日香村に土地を求めようと動いた時期もあって、村長との面会も果たしたのだが、うまくいかなかった。そうでなくてもよそ者を受け入れにくい土地柄に加え、イランといえど怖いところという固定観念が植えつけられてしまつていいるのを感じたと言ふ。苦しい思い出である。

ふたつめは、引退後の生活の安寧。授業に縛られる生活から解放放たれて、研究に没頭したいが、イランは騒がし過ぎる。図書館兼ギャラリーの運営も問題が多いし、第一、友人知人とのつきあいに疲れるに違いない、と彼は思う。要するに、しがらみがない日本に軍配が上がったのである。

そして、日本への思い入れの強さ。四半世紀のあいだ日本で暮らして、日本社会の変化も目撃してきたが、「それでも日本人の誠実さ、忍耐強さ、礼儀正しさ、秩序正しさは、世界に類を見ない」と彼は言い切る。三年前、外国人登録の更新に行つた際、担当官に永住許可申請を勧められ、とんとん拍子に手続きが終つたことも、彼の背中を押した。

日本体験の正念場

こうして、大手ハウスメーカーと契約したものの、今年一月の完成までには紆余曲折があつたと思われる。凝り性だから、型にはまった製品を使いたがるメーカーとのあいだの溝を埋めるために苦労したそう。面倒な契約などには東京から日本人の友人が駆けつけ、イランからは妹さん親子がこだわりのタイル類など一〇〇キログラムもの荷物を運んできた。新居の扉を開ければ、床はベルシア絨毯の花圖、作りつけの書架にはベルシア語の本が並べられているが、天井には日本の古い灯りが吊るされ、部屋の隅の行灯には、ベルシア書道で古典詩が書かれた和紙が貼られている。家の契約から造作・装飾まで、まさに日伊の合作、折衷の賜物なのだ。

もしかすると、これだから彼の「日本体験」の正念場なのかもしれない、とわたしは思う。外国人恩給生活者に、ローンは税金は、保険料は、重くのしかからないか。人間関係の希薄なニュータウンで孤立してしまわないか。心配は尽きない。どうか前庭に植えたシンボルツリーの柘榴の木が豊かな実をつけ、千客万来の「ベルシア文庫」がイラン研究者のオアシスになりましよう。